

言語能力に基づいた地域研究の現状と将来

Peter Ackermann

国際開発というのは、経済・技術・金融・情報などの流れとその発展だけではなく、数多くの文化・住民と密接な関係を結ぶ、ということの意味していると思います。個人と個人、集団と集団の交流がなければ、物資・情報・知識の交換は不可能であると言えます。

以前から、さまざまな地域と関係を作ろうとしている企業、学問、経済、政治などの機関や集団は、世界の国々を経済の仕組み、政治体制、文化、宗教などによって分類し、その分類をもとに政策を決めていくことが通常のやりかたと言えるでしょう。しかし、こうして世界の諸地域を分類すると、かなり固定した文化構造パターンができてしまいます。そのために、その文化のなかで起こっている変化や変遷、あるいは世代交代がもたらす価値観の変容とそれに関係するさまざまな問題の発生を早めに、かつ正確に把握することが、極めて困難になると思います。なお、個人個人の志向と狙いは決して固定したものではなく、相手との関係によって変わったり、無数の矛盾を生み出したりします。

こうした中で、人間の信頼関係をどう構築し、どう継続的に維持できるか、という問題はますます重大になってきます。しかし当然のことながら、すべての文化・言語・宗教などに通じている専門家を養成することは不可能であり、また専門家と専門分野を大きく増やすことも、現在の財政的制約などを考えると、不可能です。むしろ、専門家の数を減らし、例えば日本・中国・韓国などの専門分野を、一人の「アジア専門家」の担当分野にさせて、研究や情報交換のための言語を英語に統一するというのが、現在見られる傾向です。

以下、文化ごとの特殊性への理解、そしてその特殊性を越えた、グローバルなコミュニケーションと交流の必要性について、5つの観点から考えていきたいと思います。

1. 共通語と現地の言葉

現在、国際会議や国際レベルでの研究は、当然、共通語、つまり英語、またはフランス語で行う必要があります。また、原則として、国際コミュニケーションと外国語習得の効率をあげるためには、言語学習の目標言語をその共通語に絞った方がよいと思います。

しかし、日本語やドイツ語のように、世界的に通用する共通語以外の、限られた地域において重要な言語もあり、ソ連崩壊後の、自分の国や文化・言語に対して極めて高い誇りを持っている東ヨーロッパ諸国の言葉もあり、この30年のあいだに発達した国々とその言葉もあり、また発展途上国あるいは、なかなか発展の軌道に乗らない地域の言葉などがあ

ります。グローバル化が進めば進むほど、英語などの共通語を駆使できない人を、ただの「現地人」・「地域の住民」と片付けることは許せない態度であると思います。さらに、少数民族の言葉、地域の言葉や方言を無視することは、地域のアイデンティティーの無視として捉えられてしまう場合が多いことを強く認識しなければなりません。

簡潔に言えば、たまたま、ある現地の言葉ができない — つまり、その言葉を学習する伝統がない — からといって、その事情にあまり目を向けなくて、別の地域では言葉ができるからといってその事情を詳細なところまで把握する、というような区別は、正にグローバル化がもたらしてきた問題から考えて望ましくないことであると言えます。しかし、たくさんある言葉や言語文化をどう学習して研究すればよいか、という大きな課題が未解決のままであると言えます。

2. Macro-Meso-Micro レベルの認識

ある特定の地域では、さまざまなレベルの問題が絡み合っていることは当然です。しかし、最終的には、地域というのは、個人個人のことで、個人と個人の連帯意識、あるいは対立意識を生み出す言葉やコミュニケーション様式によって形成されるものです。Microレベルにおいて、一人一人が自分の経験、感情、価値観などを土台にして、自分の周りにいる、あるいは関係している人とやり取りしながら自分が妥当と思う生活を営みます。同時に、周りにいる人（グループ、会社、町、地域 — つまりMesoレベルにいる人）が、その集団の経験や価値観を個人に教えたり、伝えたり、押し付けたりして、グループとしてグループなりの秩序を維持しようとしします。

これらのプロセスは、すべて現地の言語・非言語行動によっておこなわれます。従って、MicroとMesoレベルを現地の言葉を抜きにして、理解することはできないといつてよいと思います。外部から（つまりMacroレベルから）現地のMicroやMesoレベルに影響を与える経済的、政治的、歴史的要素を研究するには、英語などの世界的共通語で用が足りる場合が多いと思われませんが、MesoとMicroレベルでの受け取り方に関しては、共通語だけでは直接に情報を得て、表面より深いところまで理解することは極めて難しいと言えるでしょう。

なお、それぞれのレベルの様子は、ずっと現在の形のままであるという錯覚に陥ってはならない、という重要な点を指摘しなければなりません。というのは、MicroとMesoの流れは、自分史やグループ・地域などの歴史として、絡み合いながら形成されてきたこと、そしてこれから変化・変容していくことを、個人が残した資料や個人のナラティブを通して認識する必要があります。それらの資料とナラティブは、もちろん、その人が使っている言葉で明示されています。

結論として、現地の言葉を学習するかしないかということは、どのレベルについてどんな知識を得たいかによる、と言えます。ただ、漠然とした形で、ある地域について知りたいからといってわざわざその言葉を学習するのではなく、どのレベルでなにを知りたいということを予めはっきりと決める必要があると思います。

3. 言語は特定の空間を区画します

言語を学習するのに、語彙・発音・文法・字や綴り方などが難しくても、問題とまでは言えません。問題は、言語の使い方です。一つの言葉を使うことによって、人間はある相手の空間に入り込み、その空間にあるさまざまなルール・感情・期待・常識とぶつかることとなります。書かれた文章を読んでも、直接に相手の反応はないとは言えますが、ある相手の世界にぶつかった気持ちは、コミュニケーションするときの気持ちとはそれほど変わりません。

たとえば、西洋の人にとって日本語の一番難しいところは、言葉そのものではなく、西洋の近代化のなかで形成されてきた人間像とは異なる価値観が機能している、ということです¹。もちろん、ヨーロッパのなかでも、たとえば西ヨーロッパと東ヨーロッパ、北と南ヨーロッパ、または北ドイツと南ドイツなどについて、似ているようなことが指摘できます。

言語を共通語としてではなく、特定の地域の言葉、つまり特定の空間の中にいる個人個人がM i c r oやM e s oレベルで具体的に生活を営んだり、ものごとを考慮したり、困難を切り抜けたりするための道具として学習する場合は、「知る」より「できるようになる」ことが大切だと言えます。当然のことで、相手の空間への立ち入り方、その空間のなかでの取り組み方、相手との共通点の発見過程などに注意を払う必要があります、そしてその共通点の発見過程のなかで生み出される共通の経験がコミュニケーションと相手との関係を継続的に維持する不可欠な条件になっています。

結論として、ある特定の言語を使っている相手の空間に「侵略」しないと、言葉の「道具」としての役割は認識できません。従来の留学制度や外国語研修などは、ただ「どうにかうまくなればいい」としか考えないことが多く、相手の空間に入る技術、特定のテーマの設定、そしてまたそれぞれのM i c r o世界へ入り込む苦勞や困難を十分評価しないことが

¹ 西洋の近代化を代表するキーワード：宗教的対世俗的領域、集団対個人（宗教改革がもたらした天主との個人的関係）、合理性対非合理性（自由対非合理的な束縛）、絶対主義・独裁主義対民主主義、（人間を束縛する）身体対（自由にさせる）精神、理想的な集団としての「国民国家」という発想とそのロマン主義的神秘性、「進歩」として理解される歴史、等。

普通ではないでしょうか。従って、適切な空間の設定、そして評価基準に注目する必要があると思います。

4. 言語学習と大学の役割

大学というのは語学学校ではありません。ただ漠然とした形で外国を教えたりすることは、大学の限られた財政的・人的資源を無駄に使うことになると思います。常に、言葉と学術研究の結びつきを意識する必要があります。

そこで、なんのための言語学習か、また、どのような言語学習かという問題意識は欠かすことができません。なんのための言語学習かという疑問に対しては、それは上述のMicroレベルとMesolevelの有様と特徴を一層認識するための鍵であり、特定の相手のかなりプライベートなMicroとMesolevel空間に立ち入るための手段である、と答えることができるのではないのでしょうか。いずれの場合、こうした空間への入り方にはそれなりの（学術的）方法、また、大学の枠内で行われる限りでは、学術研究・指導・評価と結びつける必要があります。

どのような言語学習を行うべきか、という問いにはどう答えたらよいのでしょうか。語学学校と異なって、大学の役割は、さまざまな疑問を引き出したり、それまでに思っていたことに対して懐疑的な態度を持たせたりすることにあると思います。言葉を学ぶことによって、「今まで考えられてきたことは本当ですか」「事情は変わってきたのではないのでしょうか、あるいは変わりつつあるのではないのでしょうか」「どうしてこうなってきたのでしょうか」「人が言っていることは、いったい何を意味しているのか、また、なぜこう言っているのでしょうか」などのような疑問が湧かないと、大学レベルの言語学習とは言えないのではないのでしょうか。

5. 研究分野の設定

抽象的に考えれば、大学レベルでの言語学習というのは、

- 特定の地域のMicroとMesolevelの領域に照明を当て、
 - そこで生活している個人と集団の言語がなしている空間へ「侵入」し、
 - そこで人とぶつかり合い、またそこで書かれた文章の理解に励み、
 - そして、これらの行動において段階ごとに批判的な態度と探究心を修練する、
- ということであると思います。

しかし、こんな言語学習を具体的に実現させるためには、いくつかの問題を解決しなければ

ばならないでしょう。

a) 地域の言葉（方言を含めて）は無数にありますが、原則として学習できる言葉は制限せざるを得ません。しかし、実際には、たとえばドイツ語の学習者が多いのに対してポーランド語などの学習者が少ない、ということは、地域研究の観点から見ていびつです。またアフリカやアジアの少数民族などの言葉を、地域研究の枠内に入れることは非常に大事なことであると言えます。なお、言語習得というのは一定の空間のなかでの行動パターン習得である、ということを考え合わせますと、その空間の設定と保証は決定的な意味を持っていることが分かります。そこで、将来研究者となるべき学生には自分の大学以外のところで、しかもなるべく研究対象になる空間の中で獲得した単位や成績を認可する道しか考えられません。ヨーロッパ共同体のなかで、こういう相互認可は少しずつ拡大するようになっていますが、事務的な障害はまだ数多く残っています。

b) 地域研究者はかならずしも研究グループや研究者サークルに属しているとはかぎりません。特定の地域を対象に研究している人が孤立していることはまれではありません。比較研究する講座や研究会などの場合、地域専門家が参加することができますが、比較研究というのは、最近人気が高いようですが、それだけが唯一の研究方法ではありません（比較研究以外に、例えば、参与観察を含めた地域の内部での変容プロセス・行政と住民レベルの相互関係・世代間のコミュニケーションと世代別の価値観などの調査が挙げられます。）そこで、自分で地域の言語を学習して、一人か少数でその地域のM i c r oレベルに明かりを当てている研究者を、なんらかの基準をもとに統合する必要がありますが、個別の言語の専門家はそのような統合役を果たすことができるとは思えないので、別の統合の仕組みを考えなければなりません。

c) 地域の言語が必要な場合と必要でない場合があります。M a c r oレベルの研究者の参考になる、英語などで出版されている資料が膨大な数で存在しています。ただし、それだけでは、自分の力で個人のレベルまで下がって、ものを聞いたり、確かめたりすることはできません。

そのために、現在の厳しい状況では、誰が、何のために、どの枠内で、どんな評価を受けながら、どこの生活空間のなかでどの地域の言葉を必要としているかを考えながら大学に相応しい言語学習のありかたを見直していかなければならないのではないのでしょうか。「国際開発」ということは、個人個人がよりよい生活が送れることを目標に掲げながら、地域と地域、言語圏と言語圏を越える協力により、共同で作られた新しいコミュニケーション空間のなかで個人や小集団の相互理解から始まるものである、と私は解釈しています。

（2007年3月7日）